

「金持ちとラザロ」

ルカの福音書 16:19～31

はじめに

今日の箇所はその字義通り、表面的に解釈するならば「よみ」と呼ばれる死後の世界についての描写、事実を記したものとなります。しかし、ここまでの文脈を振り返ってみますと「百匹の羊」「十枚の銀貨」「放蕩息子」「不正な管理人」「不正の富」とイエシュアの数々のたとえが間髪を入れずに記されてきているのです。そのような流れに続く今日の箇所だけが何のたとえでもなく、秘められた意味もない起こった事実、過去の出来事のただの描写とはどうしても考えにくいのです。たしかに今日の箇所の描写はこれまでのたとえとは一線を画すほどの異様なもので、非常に衝撃的で、また私たちの知的好奇心を掻き立てるような大変興味深い光景です。しかしその表面的な事実だけに目を奪われてしまうことは、銘形先生がよく仰っておられる物事のうわべだけを見る「たましいの理解」となり、「霊で見る」ことすなわちそこに秘められた奥義を知ることには至りません。死後の世界という衝撃的な事実の、その奥に秘められた、それよりももっと重要な、いや最も重要な「神の国の奥義」に、今日は目を留めてまいりたいと思います。どうか真理の御霊、助け主なる聖霊によって一人ひとりがこれまでの解釈、偏見、先入観、既成概念にとらわれることなく耳を傾けることができますように。イエシュアの御名によって。

1. ある金持ち

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:19 ある金持ちがいた。紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。

前回の 16:14～15 でイエシュアは「金銭を好むパリサイ人たち…に向かって言われた」とあり、その流れでこの話が始まっているとするならば、「ある金持ち」とはユダヤ人、イスラエルの民を指しています。しかしそれは 16:1～2 にたとえられていた「不正な管理人」が主人の財産を無駄遣いしてクビになることと結びつく、神に逆らい偶像礼拝を行い、主の怒りによって離散の民となったイスラエルを指しています。特にそれはこのパリサイ人たちのような墮落した霊的指導者たち、特に墮落した祭司たちを指しています。出エジプト記 25:4 を見ますと、「紫」も「亜麻布」もいずれも幕屋、神殿の奉納物に数えられており、つまりこれを受け取り、扱うイスラエルの祭司たちの、その墮落した姿がこの「ある金持ち」の姿にはたとえられているのです。

2. 門前で寝ている

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:20 その金持ちの門前には、ラザロという、できものだらけの貧しい人が寝ていた。

ここにラザロという人物が登場します。たとえに実名が用いられることはまれですが、イエシュアの言動、行動、起こった出来事のすべてが神のご計画の「型」たとえであると見るならば不思議なことではあ

りません。聖書に記されたすべての名には意味がありメッセージがあります。ラザロ(לֵאזָרַי、「助ける」という意味のアーザル(אֶזְרָא)を由来とする名です。その初出箇所である創世記 2:18 においてそれはエーゼル(אֶזְרָא)「助け手」という意味で使われました。

創世記【新改訳 2017】

2:18 また、神である主は言われた。「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」

2:22 神である主は、人から取ったあばら骨を一人の女に造り上げ、人のところに連れて来られた。

2:23 人は言った。「これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。男から取られたのだから。」

2:24 それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。

このようにエーゼル、アーザルは本来「一人の女」「その妻」を指し示しています。パウロはこれを「教会(エペソ 5:32)」と説きましたが、それはすなわち民族、人種を問わずキリストすなわちメシアであるイエシュアを信じ、愛する者となるすべての人を指しているのです。そのような意味をもったラザロという人物は「門前」に寝ていた、倒れていたとあります。ここに使われているシャアル(שַׁאֲרַי)の初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

19:1 その二人の御使いは、夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところに座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって彼らを迎え、顔を地に付けて伏し拝んだ。

19:3 しかし、ロトがしきりに勧めたので、彼らは彼のところに立ち寄り、家の中に入った。ロトは種なしパンを焼き、彼らのためにごちそうを作った。こうして彼らは食事をした。

天からの火と硫黄によって滅ぼされた町ソドム、その「門」が聖書で最初のシャアルです。その門でロトは神の御使いを喜び迎え、ひれ伏して礼拝しました。そして家に迎え入れ、食事をともし、その結果ロトは滅びを免れたのです。つまりラザロが「門前」に寝ていた、倒れていたという事実には、イエシュアを信じ、愛する者は、倒れて、すなわち死んでもよみがえり、滅びを免れ、救われるというメッセージが秘められているのです。

3. 犬がなめる

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:21 彼は金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思っていた。犬たちもやって来ては、彼のできものをなめていた。

ラザロは「金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思って」いました。実際に彼はそれを得られたかどうかはこのたとえだけではわかりません。これはイエシュアについての別の出来事と結びついているのです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

15:21 イエスはそこを去ってツロとシドンの地方に退かれた。

15:22 すると見よ。その地方のカナン人の女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます」と言って叫び続けた。

15:24 イエスは答えられた。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」

15:25 しかし彼女は来て、イエスの前にひれ伏して言った。「主よ、私をお助けください。」

15:26 すると、イエスは答えられた。「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」

15:27 しかし、彼女は言った。「主よ、そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」

15:28 そのとき、イエスは彼女に答えられた。「女の方、あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりになるように。」彼女の娘は、すぐに癒やされた。

ここに登場する「カナン人の女」は異邦人でした。「イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」と言われたイエシュアでしたが、彼女が「ダビデの子よ」すなわちイスラエルの王なるメシアの名を呼び「小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」と告白したその信仰をほめ、その願いを叶えられました。この異邦人の信仰の告白と「金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思って」いたラザロの姿が見事に結びつくのです。このように、ラザロはイエシュアの御名を呼び求める異邦人を表しているのです。

そしてこのラザロを「犬たちもやって来ては、彼のできものをなめていた」ともあります。一見大変痛ましい、惨めな光景です。しかしここに福音があります。以下の箇所を見てください。

士師記【新改訳 2017】

7:5 そこでギデオンは兵を連れて、水辺に下って行った。主はギデオンに言われた。「犬がなめるように、舌で水をなめる者は残らず別にせよ。また、飲むために膝をつく者もすべてそうせよ。」

7:6 すると、手で口に水を運んですすった者の数が三百人であった。残りの兵はみな、膝をついて水を飲んだ。

7:7 主はギデオンに言われた。「手で水をすすった三百人で、わたしはあなたがたを救い、ミディアン人をあなたの手に渡す。残りの兵はみな、それぞれ自分のところに帰らせよ。」

この出来事はイスラエルに攻めてきたミディアン人を中心とした連合軍に対して士師ギデオンが挙兵する場面ですが、主は「犬がなめるように、舌で水をなめる者は残らず別にせよ」と言われ、これが「なめる」という意味のラーカク(קקל)の初出となります。このような者たちは帰らされ、戦いを免除されたとあり

ます。つまりラザロがラーカクすなわち犬たちになめられたというこの事実には、「イエシュアを信じる異邦人が戦いを免れて帰される」というようなメッセージが秘められているのです。このメッセージつまり福音、神のご計画は終わりの日に現実となって現れます。それは世の終わりの大患難、黙示録の獣と呼ばれる反キリストが現れ、世界を支配し、自分こそがメシア、神であると宣言する時、これに立ち向かうべく神の印を押された 144,000 人のイスラエルの残りの者が起こり、真のメシアであるイエシュアを宣べ伝え、その御国の福音を宣言します。この獣とイスラエルの対立に、イエシュアを信じる異邦人たち、特に私たち教会はこれに一切関与することなく、まさに「残らず別にせよ」とあるようにされます。それはもちろん以下の預言の成就、携挙によってです。

テサロニケ【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

このように、ラザロを犬たちがなめるといふこの様子には終わりの日、私たち教会は天に引き上げられ、地上で（霊的に）戦うイスラエルの残りの者とはまさに「残らず別に」されるという神のご計画が秘められているのです。ですからラザロのこのしるし、たとえば福音であると言ったのです。

4. アブラハムの懐

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:22 しばらくして、この貧しい人は死に、御使いたちによってアブラハムの懐に連れて行かれた。金持ちもまた、死んで葬られた。

16:23 金持ちが、よみで苦しみながら目を上げると、遠くにアブラハムと、その懐にいるラザロが見えた。

「アブラハムの懐」最初におきませんがこれはシェオール、よみのある特定の場所を指し示すものではありません。ユダヤ人たちはこれを死後に自分たちが行く安らぎの場所だと捉えているようですが、これは聖書の真実に対して完全に目が塞がっていることの典型です。先に述べたようにイエシュアは死後の世界などというような文脈でここまで語ってはおられません。ではこの「アブラハムの懐」とは何でしょう、何を指し示しているのでしょうか。それはもちろんこの言葉が聖書で最初に使われて箇所にも秘められています。

創世記【新改訳 2017】

16:3 アブラムの妻サラは、アブラムがカナンに地に住んでから十年後に、彼女の女奴隷であるエジプト人ハガルを連れて来て、夫アブラムに妻として与えた。

16:4 彼はハガルのところに入り、彼女は身ごもった。彼女は、自分が身ごもったのを知って、自分の女主人を軽く見るようになった。

16:5 サライは**アブラム**に言った。「私に対するこの横暴なふるまいは、あなたの上に降りかかればよいのです。この私が自分の女奴隷を**あなたの懐**に与えたのに、彼女は自分が身ごもったのを知って、私を軽く見るようになりました。主が、私とあなたの間をおさばきになりますように。」

16:6 アブラムはサライに言った。「見なさい。あなたの女奴隷は、あなたの手の中にある。あなたの好きなようにしなさい。」それで、サライが彼女を苦しめたので、彼女はサライのもとから逃げ去った。

16:7 主の使いは、荒野にある泉のほとり、シュルへの道にある泉のほとりで、彼女を見つけた。

「**あなたの懐**」すなわち「**アブラハムの懐**」の原型がここに 있습니다。それはハガルという「女奴隷を**あなたの懐**に与えた」とあるように、アブラハムに結びつく異邦人を、アブラハムを祝福することによって祝福される地のすべての民族を指す、神の約束、ご計画を指し示す言葉なのです。実際にこのハガルはアブラハムの家を一度は追い出されますが、主の使いに見つけられ、彼女から生まれるイシュマエルもまた祝福されることを聞かされ、再び家に帰って行きます。この出来事の経緯は教会が携挙によって一度地上を離れ、イエシュアと会い、やがて再び地上に帰って来るといふ神のご計画の「型」となっており、それを指し示すものがこの「**アブラハムの懐**」なのです。よみがどのような形のどんな場所かということが重要なわけではありません。私たち異邦人がアブラハムの懐に、実際に抱かれたハガルのように、イスラエルにつながる、接ぎ木される存在であることを覚えることこそが重要なのです。

5. 大きな淵

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:24 金持ちは叫んで言った。『父アブラハムよ、私をあわれんでラザロをお送りください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすようにしてください。私はこの炎の中で苦しくてたまりません。』

16:25 するとアブラハムは言った。『子よ、思い出しなさい。おまえは生きている間、良いものを受け、ラザロは生きている間、悪いものを受けた。しかし今は、彼はここで慰められ、おまえは苦しみもだえている。』

16:26 そればかりか、私たちとおまえたちの間には大きな淵がある。ここからおまえたちのところへ渡ろうとしても渡れず、そこから私たちのところへ越えて来ることができない。』

ですからこのよみの「**炎の中**」で苦しむ金持ちとは世の終わりの大患難の中を通るイスラエルの民を指しており、一方「**アブラハムの懐**」で「**慰められ**」るラザロとは私たち教会が携挙されることを指し示しているのです。それはまさに「**私たちとおまえたちの間には大きな淵がある。ここからおまえたちのところへ渡ろうとしても渡れず、そこから私たちのところへ越えて来ることができない。**」とたとえられるべきものです。もちろん実際によみという場所がどこかに存在し、ここに描写されているような場所なのかもしれません。しかし私たちが目をとめるべき場所は、知らなければならぬ神のご計画の成就は絶対にそこではありません。私たち教会が「**連れて行かれ**」る場所は、よみなどでは決してなく、やがて空中に連れられ、私たちを花嫁として天に引き上げてくださる花婿「**イエシュアの懐**」なのです。

6. 五人の兄弟

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:27 金持ちは言った。『父よ。それではお願いですから、ラザロを私の家族に送ってください。』

16:28 私には兄弟が五人いますが、彼らまでこんな苦しい場所に来ることがないように、彼らに警告してください。』

16:29 しかし、アブラハムは言った。『彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい。』

16:30 金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ。もし、死んだ者たちの中から、だれかが彼らのところに行けば、彼らは悔い改めるでしょう。』

16:31 アブラハムは彼に言った。『モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』

この金持ちには「兄弟が五人」とありますが、これまでこの事実は見落とされてきました。しかしそのような箇所にごそ神のご計画の奥義があることを知ってください。この「五人」という人数、存在が聖書で最初に使われている箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

14:1 さて、シナルの王アマラフェル、エラサルの王アルヨク、エラムの王ケドルラオメル、ゴイムの王ティデアルの時代のことである。

14:2 これらの王たちは、ソドムの王ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アダマの王シンアブ、ツェボイムの王シエムエベル、ベラすなわちツォアルの王と戦った。

14:3 この五人の王たちは、シディムの谷、すなわち塩の海に結集した。

14:4 彼らは十二年間ケドルラオメルに仕えていたが、十三年目に背いたのである。

人名がたくさん出てきて混乱するかもしれませんが、これはアブラハムの時代に起こった大きな戦についての記述です。それは「シナルの王アマラフェル、エラサルの王アルヨク、エラムの王ケドルラオメル、ゴイムの王ティデアルの時代ことである」とあるように、これら四人の王たちが世界を支配していた時代に「五人の王たち」が立ち上がり、四人の王たちに「背いた」というものです。つまりこの「五人」という存在は世界の支配者、ちなみに四人の四という数は四方すなわち全地を意味し、この全世界の支配者に対して逆らう、立ち向かう存在を指しているのです。

これは聖書の外典マカバイ記に記されたイスラエルの歴史事実ですが、B.C.167年ギリシャのセレウコス朝の王アンティオコス4世エピファネスがエルサレムの神殿を奪い、ここにゼウスの像を置き豚のいけにえをささげて神殿をけがし、イスラエルの神、主を礼拝すること、その戒めを守ることを禁じました。エピファネスのこの暴挙に対し、敢然と立ちあがったのが祭司マタティアの五人の息子たち、ガディと呼ばれたヨハネ、タシと呼ばれたシモン、マカバイと呼ばれたユダ、アワランと呼ばれたエレアザル、アプスと呼ばれたヨナタン、まさに「五人の兄弟たち」でした。

このように「**兄弟が五人**」いる、とは世の終わりに「**モーセと預言者**」すなわち律法に聞き従い、全世界を支配する獣、反キリストに立ち向かう、逆らう者たちがイスラエルの中から起こる、ということがここには表されており、それはもちろん額に神の印を押される 144,000 人のイスラエルの残りの者を指し示しているのです。ここでアブラハムは決して金持ちの五人の兄弟たちは「**モーセと預言者の言うこと**」を聞くことない、とは言うてはおらず「**彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい**」、聞きなさい、聞くようになると言っているのであり、その御言葉は必ず成就するのです。そしてこの「**モーセと預言者**」とは何か、だれを指すのかということについてこう記されています。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

1:45 ピリポはナタナエルを見つけて言った。「私たちは、**モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いて**いる方に会いました。**ナザレの人で、ヨセフの子イエス**です。」

世の終わりに現れるイスラエルの残りの者、彼らは今日の私たち教会と同じく、いやそれをはるかに凌ぐ力と勢いをもってイエシュアこそがまことのメシアであることを宣言し、その再臨と御国の福音を大胆に宣べ伝えるようになります。そしてその宣教の働きにより、自分を神とする獣の支配の世界でありながら、おびたしい数の人々がこの御国の福音を信じ、殺されることもいとわずこれを受け入れていくのです。それゆえこう預言されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそぞ存じです」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」

「大きな患難を経てきた者たち」、ところでラザロは全身できものだらけの人でもありました。この「できもの」アヴァブオート(אֲבַבְאוֹת)は本来「腫れ物」と訳され、出エジプト記において神がエジプトを打たれた十の災いの一つを表しています。

一、ナイル川の水を血に変える(出 7:14-25)

二、蛙を放つ(出 8:1-15)

三、ぶよを放つ(出 8:16-19)

四、虻を放つ(出 8:20-32)

五、家畜に疫病を流行らせる(出 9:1-7)

六、腫れ物を生じさせる(出 9:8-12)

七、雹を降らせる(出 9:13-35)

八、蝗を放つ(出 10:1-20)

九、暗闇でエジプトを覆う(出 10:21-29)

十、長子を皆殺しにする(出 11 章、12:29-33)

この十の災いは、ヨハネの黙示録に預言された終わりの日の神の数々のさばきの「型」でもあります。その真ただ中である第六番目の災いとしてそれは位置づけられており、ラザロはそのただ中から救い出され、アブラハムの懐へと導かれる者の「型」ともなり、つまりこのラザロは先に携拳される私たち教会だけでなく、重層的にこの「大きな患難を経てきた者たち」をも指し示しているのです。そして上記の黙示録の預言はこう締めくくられます。

7:15 それゆえ、彼らは神の御座の前にあって、昼も夜もその神殿で神に仕えている。御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られる。

7:16 彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も、彼らを襲うことはない。

7:17 御座の中央におられる子羊が彼らを牧し、いのちの水の泉に導かれる。また、神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。

死後の世界、よみを指し示す箇所として知られる「金持ちとラザロ」についてのたとえ、ここにもやはり終わりの日における神のご計画が秘められており、それは「もはや飢えることも渴くこともなく…」と上記の預言の結末にあるとおり、まさに良い知らせ、福音と呼ぶべきものでした。

7. よみ

最後になぜイエシュアは「よみ」を題材に語られたのかということを考えてみたいと思います。これをシェオール(שְׂאוֹל)といいます。この名には「尋ねる」という意味のシャーアル(שָׂאֵל)という言葉が隠されており、その初出は創世記 24:47 でそれはアブラハムの子イサクの花嫁となる「ベトエルの娘」リベカを探し求めることを指し示しているのです。そうなりますとラザロが「助け手」という意味であることとも結びついて、イエシュアがご自分の花嫁、助け手となる妻を求めておられる、という理解につながります。そしてそれは「ベトエル」すなわち神の家、神の国を求めておられるということでもあり、主ご自身が御国を求めておられることをこのよみ、シェオールという名の中に奥義として表しておられるのです。ですから私たちも死後の世界としてのよみを見る、思うのではなく、そこに秘められた神のご計画の完成である「神の国」を求め、花婿なるイエシュアに求められる花嫁となることを覚え、それを待ち望まなければならないのです。ですから今日も呼び求めましょう。「主イエシュアよ、来てください」と。